

(独立行政法人教職員支援機構委嘱事業)

新たな学びに関する教員の資質能力向上のためのプロジェクト
平成27～29年度

成 果 報 告 書

(概 要)

千葉県教育委員会では、本プロジェクトを県の学力向上施策「ちばっ子『学力向上』総合プラン」の中に位置付け、小・中・高等学校の研究指定校（実践フィールド校）が、校種を越えて連携を図りながら推進してきた。

また、本プロジェクトを推進する「連絡協議会」を組織し、次世代型教育推進センターや千葉大学教育学部附属教員養成開発センター（教職大学院）等の関連機関との連携・協力を図り、研究指定校への働きかけを行ってきた。

各研究指定校では、独自の研究主題に基づき、①「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の実践研究、②教員の資質能力を高める校内研修の推進、の2点の取組から成果や課題を明らかにしてきた。各校はそれぞれ公開研究会を実施し、授業展開も伴って県内外の教育関係者に公表し、その成果の普及を図ってきた。

県教育委員会では、独立行政法人教職員支援機構との共催による本プロジェクトに係るセミナーの開催や、ホームページ上での掲載を通して、研究指定校の実践やその成果を県内の各学校へ周知してきた。

(推進地域) 千葉県我孫子市

(実践フィールド校) 我孫子市立我孫子第一小学校
我孫子市立我孫子中学校
千葉県立我孫子東高等学校

平成30年3月

千葉県教育委員会

1 プロジェクトの取組のねらい

平成28年12月21日に出された中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」（以下、「答申」という）では、新たな学びについて、以下のよう

に記載されている。

「学びの質を高めていくためには、（中略）『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けて、日々の授業を改善していくための視点を共有し、授業改善に向けた取組を活性化していくことが重要である。」

「これが『アクティブ・ラーニング』の視点からの授業改善であるが、形式的に対話型を取り入れた授業や特定の指導の型を目指した授業技術の改善にとどまるのではなく、子供たちそれぞれの興味や関心を基に、一人一人の個性に応じた多様で質の高い学びを引き出すことを意図するものであり、さらに、それを通してどのような資質・能力を育むかという観点から、学習の在り方そのものの問い直しを目指すものである。」

千葉県教育委員会では、この答申に示された新学習指導要領の趣旨に沿い、「主体的・対話的で深い学び」を実現する教員の資質能力の向上、また、「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善による子供たちの資質・能力の育成をねらいとし、「新たな学びに関する教員の資質能力向上のためのプロジェクト」（以下、「プロジェクト」という）を推進していくこととした。

2 プロジェクトの推進体制・推進方法

①県の学力向上施策に位置付けて実施

本県では、「第2期教育振興基本計画」を受け、ちばっ子「学力向上」総合プラン（ファイブ・アクション）を策定し、その中の1つの視点である「子どもいきいき『授業力アップ』プラン」の中で、新しい時代に必要な資質・能力を育成するための授業力向上に関する事業『ちばっ子の学び変革』推進事業（以下、「事業」という）を平成27年度から展開し、児童生徒の学びの深化を目指す取組を進めている。本プロジェクトはこの事業の中に位置付け、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の実践研究と、教員の授業力向上に向けた校

内研修の推進を図ってきた。このことにより、本プロジェクトの位置付けや目的、役割が明確になり、形成的な評価を伴いながら、教育委員会としての継続的な取組に繋げていくことができた。

②連絡協議会を立ち上げてプロジェクトを推進

本プロジェクトを推進する中心的な組織として、連絡協議会を立ち上げた。構成員を、次世代型教育推進センター、千葉大学教育学部附属教員養成開発センター（教職大学院）、千葉県総合教育センター、教育事務所の各担当者、教育庁指導課担当者とし、各関係機関が連携・協力を図りながら推進していくことにした。（【図1】参照）この協議会は、以下を主な内容として、年3回の開催を基本とした。

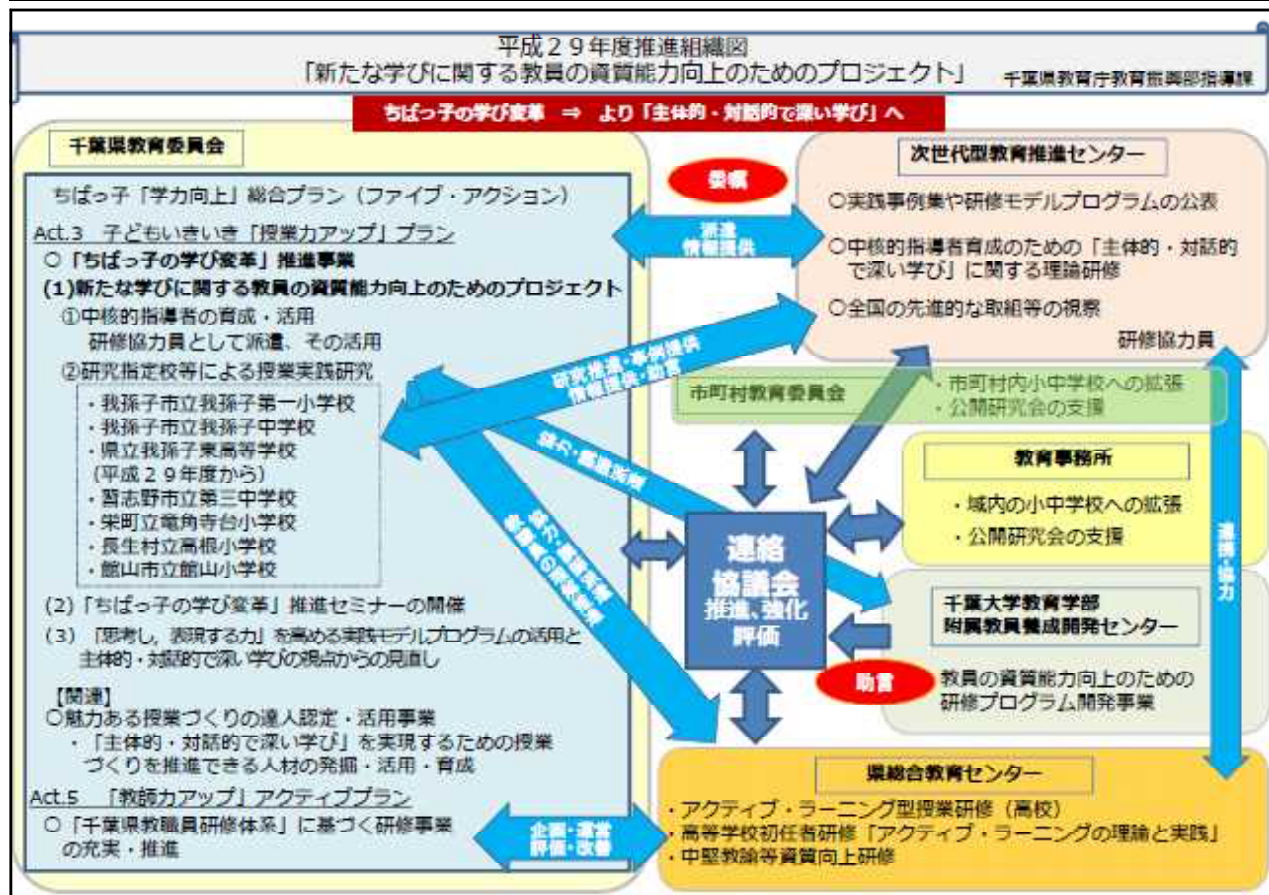
- ・研究指定校における検証事業や校内研修の参観及び実践報告
- ・研修協力員による国や他県の情報提供・共有
- ・研究指定校の取組の改善・充実に向けた意見交換

③小・中・高等学校の連携による実施

本県では、本プロジェクトの推進地域を「我孫子市」とし、我孫子市立我孫子第一小学校、我孫子市立我孫子中学校を研究指定校（実践フィールド校）としてスタートした。2年目からは、同じ我孫子市内の県立我孫子東高等学校を研究指定校に加えることとした。本プロジェクトの委嘱地区（全11都県）の中では、小・中・高等学校で連携を意図した取組の実施は、本県の特徴の1つとなっている。具体的には、教員が相互に授業を参観して協議し合ったり、互いの校内研修会に参加したり、連絡協議会場で情報交換を行い、優れた指導方法や校内研修の在り方を共有して、自校の研究に反映させてきた。このように校種を越えた連携を図ることで、各校が児童生徒の学びの系統性を意識し、それぞれの段階での学びを深める重要さの理解が一層進んだ。

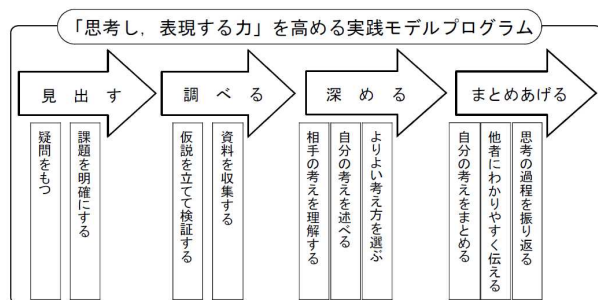
④研究指定校を拠点に、全県下を取組を拡大

本年度（平成29年度）は、県内での推進を、我孫子市から千葉県全体に広げるために、各事務所管内に1校ずつ研究指定校（小学校3校、中学校1校）を増やして、全7校で実践研究に取り組んできた。先進研究指定校である我孫子の3校での研究成果を取り入れつつ、各校が自校の児童生徒の「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた、独自の授業改善、校内研修の実践研究に取り組んでいる。



【図1 平成29年度推進組織図】

⑤千葉県の「『思考し、表現する力』を高める実践モデルプログラム」の活用



【見出す】

提示された資料等から、学習問題がわかり、話し合い活動等を通して自分
の課題を明確にしていくことで、強い学習意欲がわいてくる段階

【調べる】

課題を解決するための仮説を立て、児童生徒の実態に応じた方法で、様々な情報を目的意識を持ちながら調べていくことで、自己解決力が育つ段階

【深める】

見通しを持って調べた結果をまとめていくとき、自分の考えだけでなく、友だちの考えを聞き、話し合うことで、思考力を深めることができる段階【まとめあげる】

話し合い活動等

また、自分の思考過程を振り返る段階

「『思考し、表現する力』を高める実践モデルプログラム」を開発した。本プロジェクトの研究指定校でも、このプログラムと新学習指導要領で示された授業改善の視点である「アクティブ・ラーニングの視点」を有機的に関連させた授業づくりに取り組んできた。今後は、この「『思考し、表現する力』を高める実践モデルプログラム」に見直しをかけ、「主体的・対話的で深い学び」を実現する上でも、よりよいものに改良していく予定である。

新時代を生きる自ら考え、判断し、表現する生徒
⇒「生徒と共に創り上げる授業」

我孫子中版アクティブ・ラーニング型授業

○生徒たちが自発的に導き出す学習問題

○考え、課題を深める
小グループの活用。

○まとめ、表現し、共有する活動の充実
※難しい言葉を使わずに、「自分たちの言葉」を使う「まとめ」

見出す 調べる 深める まとめあげる
 <「思考し、表現する力」を高める実践モデルプログラム>
 (千葉県教育委員会)

○手法 ・KJ法 ・シグソー法 ・課題解決学習
・ディスカッション ・ディベート など

言語活動の充実

【図2 我孫子中学校の授業構想図】

3 研究指定校（実践フィールド校）の成果

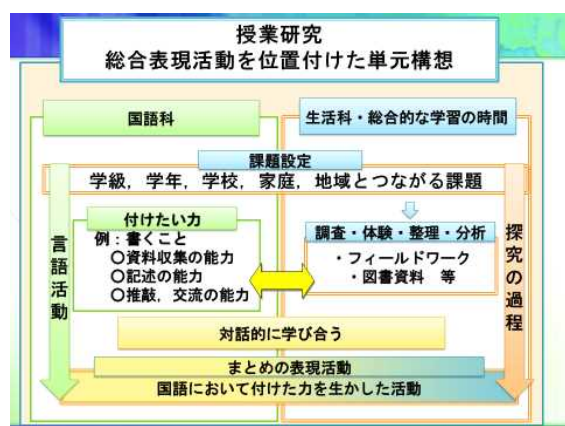
（1）我孫子市立我孫子第一小学校の実践概要

我孫子第一小学校の実践研究の一番の特徴は、授業改善に向け「単元構想・単元づくり」に重点的に取り組んできたことである。

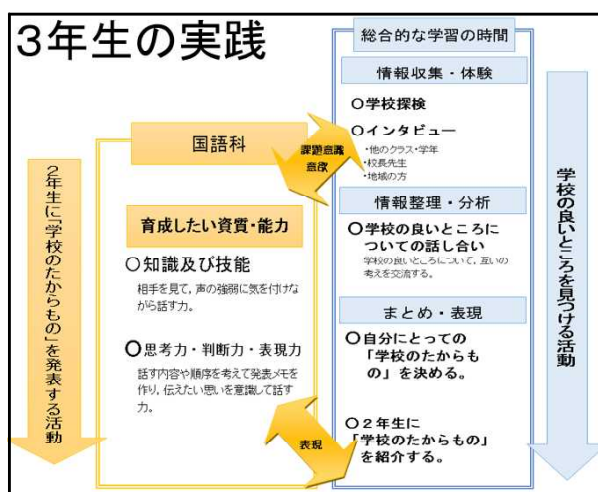
育成を目指す資質・能力を「実社会・実生活で生きてはたらく表現力の育成」とし、基軸教科を国語科として、研究の1年目は、表現力を高めるための言語活動の充実を目標にしてきた。その中で、子どもたちが本当に表現力を身に付けていくためには、子どもにとって表現する価値のある場や課題を設定していくことが大切であること、また多様な表現方法を系統的に積重ねたり、他教科等でも繰り返し経験したりすることの大切さに気付いていった。

そこで、2年目からは、国語科と生活科、総合的な学習を関連させ、教科等横断的な視点からの単元を構成した学習として、「総合表現活動」を独自に定義して取り組んできた。特に3年目は、「地域とつながる総合表現活動」として、地域や学区に目を向けて、その価値を再認識できるような地域教材を活用しながら、資質・能力を身に付けていくことができるようにしていった。

このように、教科等横断的な視点で教育内容を組織的に配列していくこと、また地域等の外部の資源を有効に活用しながら教育内容の質を高めていくことは、新学習指導要領でも、カリキュラム・マネジメントの実現に向けた重要な側面として明記されている。我孫子第一小学校が、子どもたちの資質・能力の育成を追究して研究を進めた結果、この考え方に非常に近い研究になっていった。



【図3 我孫子第一小学校「総合表現活動」を位置付けた単元構想図】



【図4 我孫子第一小学校 第3学年単元構想図】

（2）我孫子第一小学校の成果

①「単元」で捉える「主体的・対話的で深い学び」が実現する実践へ

図4にある通り、「総合表現活動」を位置付けた単元構想の方法は、まず、国語科と総合的な学習の時間、それぞれで、その単元で目指す資質・能力を明らかにする。そして、指導計画の中で、第何次のどの時間に、どのような学習活動を行うのか、どんな手立てで行い、評価の観点はどうするのかという学習過程を明確にしていく。単元全体を見通して、「主体的・対話的で深い学び」を実現する学習場面を、意図的に配置していくのである。つまり、「総合表現活動」は、単元のまとまりの中で、「主体的・対話的で深い学び」を実現し、子どもたちの資質・能力を育成していくものとなった。

②使える年間指導計画の作成と教育課程（カリキュラム・マネジメント）の充実へ

「総合表現活動」を教育課程の中心に据えて全学年で展開していくためには、どの学年でどんな単元を実施し、どのような資質・能力を育成をするのか、また他教科とどのように関連するのかを視覚的に捉えることのできる、年間指導計画が必要になる。我孫子第一小学校では、学年の系統性（縦のつながり）と、教科等横断的な視点（横のつながり）を意識し、内容面だけではなく、資質・能力の面でも整備された年間指導計画の作成を目指した。その結果、学校全体の教育課程（カリキュラム）が、授業改善と方向性を合せて整備され、充実していくことになった。

平成28年度 生活科 年間計画

学年		1学期				2学期				3学期			
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1年	内容	・とちどちとくさんくくるう	・わたしのがっこうとんのかこ 【はなはたのようちと山生(山生)】 【はなはたのようちと山生(山生)】	・わたしのがっこうとんのかこ 【はなはたのようちと山生(山生)】 【はなはたのようちと山生(山生)】	・わたしのがっこうとんのかこ 【はなはたのようちと山生(山生)】 【はなはたのようちと山生(山生)】	・わたしのがっこうとんのかこ 【はなはたのようちと山生(山生)】 【はなはたのようちと山生(山生)】	・わたしのがっこうとんのかこ 【はなはたのようちと山生(山生)】 【はなはたのようちと山生(山生)】	・わたしのがっこうとんのかこ 【はなはたのようちと山生(山生)】 【はなはたのようちと山生(山生)】	・わたしのがっこうとんのかこ 【はなはたのようちと山生(山生)】 【はなはたのようちと山生(山生)】	・わたしのがっこうとんのかこ 【はなはたのようちと山生(山生)】 【はなはたのようちと山生(山生)】	・わたしのがっこうとんのかこ 【はなはたのようちと山生(山生)】 【はなはたのようちと山生(山生)】	・わたしのがっこうとんのかこ 【はなはたのようちと山生(山生)】 【はなはたのようちと山生(山生)】	・わたしのがっこうとんのかこ 【はなはたのようちと山生(山生)】 【はなはたのようちと山生(山生)】
	他教科との関連	国語科 みんなのなまえ	国語科 みんなのなまえ			国語科 わたしのがっこうとんのかこ	国語科 わたしのがっこうとんのかこ	国語科 わたしのがっこうとんのかこ	国語科 わたしのがっこうとんのかこ	国語科 わたしのがっこうとんのかこ	国語科 わたしのがっこうとんのかこ	国語科 わたしのがっこうとんのかこ	国語科 わたしのがっこうとんのかこ
2年	内容	・今年生になったよ	・わたしのがっこうとんのかこ 【はなはたのようちと山生(山生)】 【はなはたのようちと山生(山生)】	・わたしのがっこうとんのかこ 【はなはたのようちと山生(山生)】 【はなはたのようちと山生(山生)】	・わたしのがっこうとんのかこ 【はなはたのようちと山生(山生)】 【はなはたのようちと山生(山生)】	・わたしのがっこうとんのかこ 【はなはたのようちと山生(山生)】 【はなはたのようちと山生(山生)】	・わたしのがっこうとんのかこ 【はなはたのようちと山生(山生)】 【はなはたのようちと山生(山生)】	・わたしのがっこうとんのかこ 【はなはたのようちと山生(山生)】 【はなはたのようちと山生(山生)】	・わたしのがっこうとんのかこ 【はなはたのようちと山生(山生)】 【はなはたのようちと山生(山生)】	・わたしのがっこうとんのかこ 【はなはたのようちと山生(山生)】 【はなはたのようちと山生(山生)】	・わたしのがっこうとんのかこ 【はなはたのようちと山生(山生)】 【はなはたのようちと山生(山生)】	・わたしのがっこうとんのかこ 【はなはたのようちと山生(山生)】 【はなはたのようちと山生(山生)】	・わたしのがっこうとんのかこ 【はなはたのようちと山生(山生)】 【はなはたのようちと山生(山生)】
	他教科との関連			国語科 わたしのことをとえよう		国語科 わたしのことをとえよう	国語科 わたしのことをとえよう	国語科 わたしのことをとえよう	国語科 わたしのことをとえよう	国語科 わたしのことをとえよう	国語科 わたしのことをとえよう	国語科 わたしのことをとえよう	国語科 わたしのことをとえよう

【我孫子第一小学校 年間指導計画(一部)】

※ 我孫子第一小学校「総合表現活動」の詳細については、こちらを御覧ください。

→ <http://stg2.chp.pbl.pref.chiba.lg.jp/kyouiku/shidou/gakuryoku/aratanamanabi/siteikounotorikumi.html>

(3) 我孫子市立我孫子中学校の実践概要

我孫子中学校の特徴は、校内の研究体制を確立して校内研修の充実を図り、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた教員の資質能力向上に重点を置いて推進してきたことである。

中学校は教科担任制であり、他教科の教師が教科を越えて授業を見合ったり、授業についての協議をし合ったりすることが難しい面がある。しかし、我孫子中学校は、工夫を重ね、教科の枠を越えて授業について互いに高め合う校内研究体制を確立していくことができた。この体制を実現するためには、以下の3点がポイントであった。

①「学習内容」からのアプローチ(教科部会)

我孫子中学校の指導案は、個人だけではなく、教科部会で検討し、完成させていく。そこには、「各教科として目指す生徒像」と、本時の「授業の見どころ」の2つを明記することにした。

これは、学校の教育目標の実現、そして研究主題も照らした上で、3年間の教科の学習内容を見据えて考えた、＜育てたい生徒の資質・能力＞と、＜本時のねらい＞に当たるものである。

この2つが指導案に記載されることによって、他教科の教師にも授業者の意図が明確に伝わり、授業のどこにポイントがあるのか、生徒のどのような学びを見取ればよいのかを理解して、授業を見ることができるようになった。また、「授業の見どころ」は、授業後の協議会の論点にもなっていった。

我孫子中・技術科として目指す生徒像	
よりよい社会の実現のために、ものづくりから得た知識・技能を、 実生活に活用できる生徒	
私達の生活が豊かになったのは、能くも巧く技術の進歩のおかげである。一方で、資源の減少や環境破壊が問題となっている。技術科で得た技術を使い、限りある資源を有効活用することなど、よりよい社会の実現に向けて活動する生徒を育成していきたい。特に「持続可能な社会」の構築が求められる時代を生きる生徒達には、ものづくりによって修得した技術を駆使し、身近な課題を解決できる能力を育成していくことが求められる。そのために以下の3つの能力の育成を目指す。	
①計画的に作業工程を進める力 ②知識・技能を生活に活用する力 ③技術を適切に評価する力	
これらの3つの能力を育成するために、技術科では、アクティブ・ラーニング型授業の実践を進め、以下の2点に力を入れていく。 作業を行うだけに終わらず、活動から得た技術の進歩がもたらす生活の変化を社会的・経済的・環境的に考察し、活用しようとするのが主体的学びと捉え、指導にあたっていく。	

【図6 我孫子中 教科として目指す資質・能力】

授業の見どころ	
理科 本時の授業の見どころ	
目で刺激を受け取る感覚神経から脳へ、脳から脊髄、そして運動神経へと電気信号が送られ、筋肉が反応することを理由付けして説明できることをねらいとしている。そこで、「ものさしを落としてつかむ実験」を行う。自分が落とした場合はすぐにつかめるが、他の人がものさしを落とした場合はすぐにつかむことができないという結果になる。その結果から生徒たちに考えさせ、学習課題を解決するために以下の2点に重視して指導に当たる。	
①「なぜ、他の人が落としたものさしはすぐにつかめないのか」という疑問に対して、4人グループで話し合いをさせ、グループ全員が理由付けして説明できるようにさせたい。	
②考察で考えたことをもとに検証実験を行い、結果からさらに考えを付け加えられるように指導したい。	

【図7 我孫子中 本時の授業の見どころ】

②「学び方」からのアプローチ(全体協議会)

教科の枠を越えて、全員で授業を参観し全員で協議をする全体協議会を、我孫子中は「我孫子ラウンドテーブル」とネーミングしている。

これには、教科のみならず、経験年数や分掌等の立場も越えて、授自由意見交換し合うことも大きな目的として実施してきた。これを可能にしたのは、授業の見方である。

「我孫子ラウンドテーブル」では、教師の＜教え方＞が主な授業観察の対象ではない。「生徒の学び」とそれに対する教師の＜対応＞について、徹底的に授業を見取っていくのである。

「授業のどこで生徒の学びが深まったのか」（青色の付箋に記入）「学びが停滞した原因と有効な教師の対応は何か」（赤色の付箋に記入）に注目して、全員が授業を見取っていく。授業後は、拡大指導案に青色と赤色の付箋を貼りながら、少グループで協議していく。特に、青色と赤色の付箋が混在した場面は、参観者によって見方が分かれ、議論が深まる場面となった。

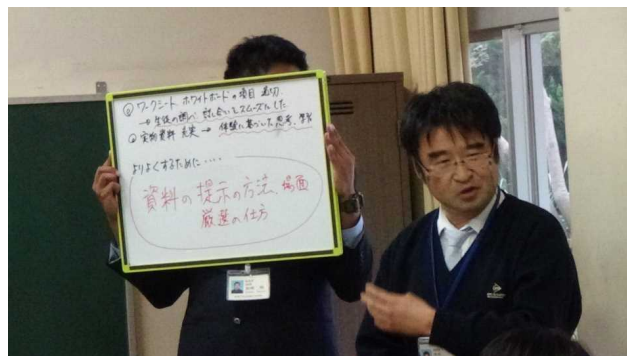


【写真1 拡大指導案を使った協議会の様子】

③本時の改善にとどめない「提言」

授業研究会後の協議会では、講師の話で終わることが多い。しかし、「我孫子ラウンドテーブル」では、各グループが協議したことを基に、明日からの授業改善に向けて取り組むべきこと、考えていくべきことを「提言」の形で発表し合い、共有していくことにした。これによって、協議会は本時の指導と助言の場にとどまらず、各自が明日からの授業改善へのヒントを得ることができる場となるのである。また、課題を全職員が共有することで、全教科の全授業で課題改善に向けた取組が意識されるようになっていった。

教師が本気で生徒の学びに向き合い、1回の授業の事実から何を学び、次にどうしていくのかを共に考えて、確実に実践につなげていく。これが、我孫子中学校が目指した校内研修「我孫子ラウンドテーブル」の在り方であった。



【写真2 協議会での提言の様子】

（４）我孫子中学校の成果

①全校体制（チーム学校）で生徒の資質・能力を育成しようとする雰囲気の醸成

我孫子ラウンドテーブルによる校内研修を繰り返すことで、他教科でのよい取組も積極的に自身の授業に取り入れようとする姿が広がった。生徒の実生活からの課題設定、ホワイトボードで思考を構造化し、可視化していく話し合いの方法、自分と周囲の変容をメタ認知する振り返り（リフレクション）の方法は、我孫子中のどの教科の授業にも多く取り入れられ、我孫子中スタイルの定番となっていった。また、他教科の授業を参観する機会が増えたことで、「この内容は自分の教科のこの部分と関連付けて扱いたい」「複数の情報を関連付けて考える能力の弱さは、教科を問わず高める必要がある」など、教科等横断的な視点からの発言が増え、回を重ねるごとに、学校全体で生徒の資質・能力を育成していこうとする雰囲気が醸成されていった。

このことが、生徒の学びに確実な成果をもたらした。平成29年度の全国学力・学習状況調査の結果は、県や全国平均を大きく上回った。また、生徒がアクティブ・ラーニングの視点による授業の価値を自覚し、自分の学び（方）を説明できる力、自分で自分の学び（方）を選んで自覚的に学ぶ力を身に付けている姿も見られた。

②校内研究体制での役割の明確化。専門性を追究する教科部会から深い学びの充実へ

我孫子ラウンドテーブルを繰り返すことによって、「学習内容」の面から生徒の資質・能力の育成にアプローチする教科部会の役割の重要性を再認識することにつながった。「生徒の学び」を中心に授業を見取り、協議していく我孫子ラウンドテーブルでは、「主体的な学び」の視点と「対話的な学びの視点」については、協議が深まっていくが、教科内容や教科特有の学

習プロセスについて（「深い学び」の視点に関するもの）は、教科部会で検討する必要性が生じてきた。このため、我孫子ラウンドテーブルの直後に、教科部会が開かれて議論されることが多くあった。

全体で協議する我孫子ラウンドテーブルは何を目的とするのか、教科部会では何をすべきか、というそれぞれの役割が明確となり、メリハリのついた校内研修体制の確立され、無駄を省いた効率的且つ有効な校内研修が実施されていくことになった。

※我孫子中学校の「我孫子ラウンドテーブル」の詳細は、こちらをご覧ください。

<https://www.pref.chiba.lg.jp/kyouiku/shidou/gakuryoku/aratanamanabi/siteikounotorikumi.html>

（５）県立我孫子東高等学校の実践概要

我孫子東高等学校では、本プロジェクトの指定を受け、研究主題を決定し、研究推進のリーダー教諭と推進チームが結成され、全体講師を決める、という校内の研究体制を作っていくところからスタートしていった。

我孫子東高等学校は、学校として目指すべき研究の方向性を全職員で協議して決定し、教科部会や教師個人がそれぞれに工夫しながら進めていくという研究の推進スタイルをとった。

まず、全職員にアンケートを実施し、我孫子東高等学校の生徒に必要な資質・能力は何か、本プロジェクトを推進する上で、どんな資質・能力の育成を目指すかを決めていった。

育成を目指す資質・能力は「基礎学力」と「コミュニケーション能力」。そのための教師の授業改善の手立ては「生徒のモチベーションを高める学びへの動機付け」と決定し、これを全職員で共有し、各授業で実践していった。

全職員の共通認識のもと、学校体制として、同じ目的で実践を繰り返していったことが成果につながった。校内研修会では、「教師のどのような手立てや働きかけが、生徒のモチベーションを高めることになっていたのか」ということに議論が焦点化され、教師同士が指導方法について意見交流をしたり、情報交換をしたりする様子が見られた。

①授業実践事例１ 国語「夢十夜」のベストシーンを絵に描いて紹介し合う



【写真３ 国語「夢十夜」の授業の様子】

教師は、長い文章や、難解な部分・含蓄のある表現を含む文章を読むことに抵抗感を感じる生徒に対して、細部の表現や言葉にこだわりながら読むことを通して言葉の美しさや深さを発見し、それに感動しながら読み深めていくことの楽しさを味わわせていきたいと考えた。そこで、各自が小説のベストシーンを絵に表す活動を取り入れた。言葉からイメージした世界を視覚的に表現するという、異なる表現方法に変換することで、創造性を養いつつ、文や文章、言葉から離れることなく表現に即した読みが実現できると考えたからである。この言語活動に相応しい学習材として、色彩表現や幻想的な描写の多い「夢十夜」を選び、どの場面（表現）をどんな意図で絵に表したかを互いに交流する話し合い活動を設定した。自分と他者との見方、感じ方、考え方の違いからより豊かに読み味わい、小説を精読する楽しさや価値に気付かせ、さらに生徒の日常の読書生活へとつなげていきたいと考えた授業実践であった。

②授業実践事例２「英語でコミュニケーションを図ろう」



【写真４ 英語の授業の様子】

英語を話そうとしたりすることに消極的な面が見られ、文法や単語の難しさを感じたり、間違えることに不安を覚えたりしている生徒に対して、教師は英語で伝え合うことの楽しさや価値に気付かせ、積極的に英語を使ってコミュニケーションを図ろうとする態度を養っていきたく考えた。そこで、日常の具体的な場面を設定し、身近な話題や実用的で平易な英語表現を多用することで、少しでも英語に対する抵抗感を和らげ、楽しさに繋げていく手立てをとった。また、英語を駆使して活躍する本田圭佑選手が、『以心伝心』という日本独特の考え方が世界では通用せずコミュニケーションを取り合うことでチームとしての結束力を高めていった』というエピソードに注目し、日本社会が直面しているコミュニケーションの問題について考えていくことで、英語で伝え合うことの価値についても理解を深めていきたいと考えた授業実践であった。

※授業の詳細は以下をご参照ください。

<http://www.nits.go.jp/jisedai/achievement/jirei/index.html>

（６）我孫子東高等学校の成果

①全校体制での取組への広がり

生徒のモチベーションを高め、コミュニケーション能力を育成するために、多くの授業で生徒同士の協働学習や話し合い活動が取り入れられていった。生徒も、授業中に自分の考えを表出したり議論したりする場面が増え、「みんなで話し合う方が（内容が）頭に入りやすい」という声も多く聞かれるようになった。このような生徒の変化もあり、当初は研究推進グループが中心であったが、２年間のうちに全校体制での取組へ広がりを見せていった。



【写真5 全体講師を招聘した校内研修会】

また、年数回、全体講師（前教科調査官 現敬愛大学教授 向後秀明氏）を招聘し、全職員が参加する校内研修を継続する中で、教師同士が授業について情報交換をしたり、意見交流をし合ったりする場面も増えていった。

②教科を越えた教師同士の学び合いへ

高等学校では、中学校以上に教科の専門性が高くなり、教科を越えた協議や議論が難しい面もある。しかし、我孫子東高等学校の研究が、全校体制での取組に広がり成長していくに伴い、教科の垣根を越えて、主体的・協働的な学びにつながる指導手法の導入や指導形態の工夫について情報交換を行うことで、授業改善への意識や関心の高まりが見られるようになった。特にプロジェクターやタブレットなどの ICT 危機を駆使した授業や、我孫子中学校の授業等から取り入れた、ホワイトボードを使って思考を可視化しながらの話し合いを取り入れた授業が多くなった。また、相互に授業参観をすることで、板書計画（文字の大きさや色の使い方）や発問、指名計画など、他教科の授業からも教師同士が学び合い、授業力向上、授業改善につながっていった。



【写真6 公開研究会の場面 教科も校種も越えた授業についての議論が展開】

※我孫子東高等学校の取組の詳細は、こちらをご覧ください。

<https://www.pref.chiba.lg.jp/kyouiku/shidou/gakuryoku/aratanamanabi/siteikounotorikumi.html>

4 本プロジェクトの成果公表と普及

本県では、プロジェクトの成果公表を次の方法で行ってきた。

- ・独立行政法人教職員支援機構との共催によるセミナーの開催
- ・研究指定校（3校）の公開研究会の実施
- ・県教育委員会ホームページによる公開
- ・研修協力員や指導課担当者、及び研究指定校教員による研修講師等の活動

（１）「ちばっ子の学び変革」推進セミナー （次世代型教育推進セミナー）の開催

平成28、29年度は、独立行政法人教職員支援機構との共催で、本プロジェクトに係るセミナーを開催した。目的は、県内外の主に小・中・高等学校の教員に向け、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善への啓発を行うこと、参加者相互の情報交換や意見交流の場を提供すること、そして県内の研究指定校の研究成果の報告・公表の場とすることであった。

①「ちばっ子の学び変革」推進セミナー 平成28年度次世代型教育推進セミナー

- 日時 平成28年8月2日（火）
- 会場 京葉銀行文化プラザ
- 参加者人数 130名
- 主なプログラム
 - ・講義「学習指導要領改訂の動向」
文部科学省初等中等教育局 教育課程課 石田有記専門官
 - ・発表、演習 次世代型教育推進センター
 - ・研究指定校の実践発表



【写真7 平成28年度セミナーの様子】

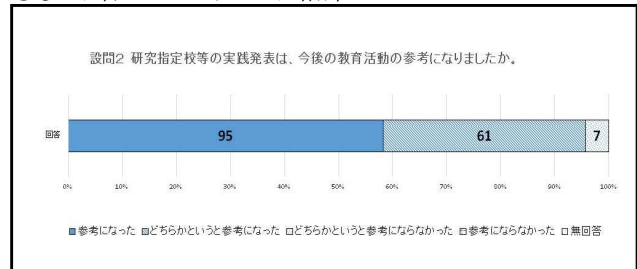
②「ちばっ子の学び変革」推進セミナー 平成29年度次世代型教育推進セミナー

- 日時 平成29年8月29日（火）
- 会場 千葉県総合教育センター
- 参加者人数 214名
- 主なプログラム
 - ・講義「主体的・対話的で深い学びの実現に向けて、カリキュラム・マネジメントにどう取り組むか」 大谷大学 荒瀬克己教授
 - ・発表、演習 次世代型教育推進センター
 - ・学校種別分科会 研究指定校の実践発表

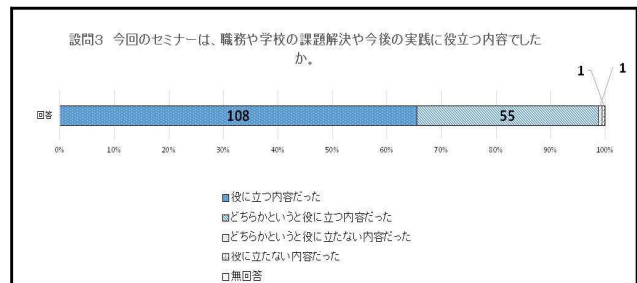
○セミナー参加者のアンケートから

- ・実際にどのような授業を行い、失敗なのか成功なのか、それはどうしてなのかを丁寧に指導してもらい、自分の授業に生かせるイメージがわいた。
- ・生徒の学びに注目した取組により、他教科の先生とも同じ授業について協議し、深め合うことができることがよくわかった。
- ・目指す児童像をより具体的に考え直していかなければ授業改善は進んでいかないと実感した。

○参加者のアンケート結果



【図8 平成29年度セミナー研究指定校の発表についての満足度】



【図9 平成29年度セミナー全体の満足度】

参加者の満足度は非常に高く、セミナー開催の目的が達成されたことが分かった。本セミナーを県内教職員への啓発の場、各研究指定校の成果公表の場として位置付け、より充実した内容で次年度以降も継続して開催していきたいと考える。

（２）研究指定校３校の公開研究会開催

本プロジェクト３年目の平成２９年度は、研究指定校３校でそれぞれ公開研究会を実施し、授業展開も伴って、これまでの研究成果を公表・普及した。計３６学級が授業を展開し、のべ４８０名余りの参加者があった。

日時	学校名	参加者	授業展開
11/22	我孫子第一小	142名	7学級
10/ 6	我孫子中	265名	16学級
11/ 8	県立我孫子東高	72名	13学級

①我孫子第一小学校公開研究会

各学年と特別支援学級それぞれで、我孫子第一小学校が独自に定義した「総合表現活動」の具体的な授業を展開した。特に学年間の系統性を意識的に提示する授業提案であった。

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に取り組む中で、我孫子第一小学校が「総合表現活動」を核に研究を進めた結果、学校としての教育課程の編成、カリキュラム・マネジメントの重要性に行き着いた研究の過程と成果を、年間指導計画の作成も併せて提案していくことができた。



【写真８ 第３学年の授業の様子】

また、講演会では「他教科の学びに生きる国語科学習」の演題で、筑波大学名誉教授、元文部科学省視学官の鳴嶋甫先生に御講演をいただいた。我孫子第一小学校の取組に対し、新学習指導要領の趣旨に沿い、より一層教科等横断的な視点を意識した教育課程を編成していくことの重要性を御示唆いただいた。

②我孫子中学校公開研究会

16学級で授業を展開し、その後は、我孫子中学校独自の「我孫子ラウンドテーブル」での分科会を実施した。参加型、演習形式での実施であり、参加者が授業について、活発に意見交換をしたり、議論をしたりする様子

が見られた。このような分科会は、これまでの公開研究会では、あまり多く見られないスタイルであり、参加者からは多くの満足の声が聞かれた。



【写真９ 我孫子中学校公開研究会全体会】

また、我孫子ラウンドテーブルの全体会は、全体講師の信州大学准教授 青木一先生のファシリテートのもと、生徒が登壇して我孫子中学校の授業について意見を述べたり、フロアはトータライザーで参加したりするプログラムであった。最後まで参加者を巻き込んだ、まさに全員参加型の公開研究会となった。

③県立我孫子東高等学校公開研究会

展開された13学級の授業では、生徒が少人数に分かれて議論をしたり、プレゼンテーションをしたりするなど、自分の考えを発表して交流する活動や学習の場面が多く見られた。

全体会では、全体講師の向後先生から、授業改善が進みつつある我孫子東高等学校の今後の取組について、次のような御指導をいただいた。

- ・今回のプロジェクトでの取組のように、小、中、高等学校の教師同士が連携して互いに学び合う機会をもつことは非常に重要である。
- ・（我孫子東高の）生徒は、発表のスキルを上げていく段階にきている。そのためには、他者の発表に対して質問する力を高めていくことが、まずは大切である。
- ・小グループでの議論の質を高めていく必要がある。そのためには、様々な話し合いのバリエーションを経験させていくとよい。
- ・評価について、我孫子東モデルのループリックを作成していくことを検討してはどうか。
- ・正解のない学習、いつも正解があるわけではないことに生徒を慣れさせていく。正解のないことに対して、互いに協議し合い、納得解、最善解を見出していく学習を積み重ねていくことが大切である。

5 本プロジェクト全体の本県の成果と課題

(1) 成果

- ①「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた取組として、「**教科等横断的な視点**」からのアプローチが重要であることが分かった。新学習指導要領で謳われているアクティブ・ラーニングの視点とカリキュラム・マネジメントの三つの側面は非常に親和性が高く、相乗効果を生み出すものであることが実践研究から明らかになった。
- ②小・中・高等学校で相互に連携を図って推進していくことが非常に有効な方法であることが分かった。校種を越えて連携することで、多様な視点から、指導方法（発問や板書、教具等）の情報交換ができたり、指導案の書き方や教材研究の在り方を共有したりすることができる。また、小学校から高等学校（高大接続までを含め）まで、一人の子どもの学びの連続性を考慮していくことの重要性に、教師が気付いていくことになった。
- ③**全校体制で取り組むことが必須**であることが分かった。「主体的・対話的で深い学び」の実現は、教員と学校との創意工夫に基づく、不断の授業改善の営みである。個人や一部の教師だけが取り組むのではなく、学校体制として授業改善が推進された時、初めて児童生徒の資質・能力の向上、そして学校教育目標の実現につながっていくのだということが、研究校の実践から明らかになった。
- ④本プロジェクトの推進によって、**児童生徒、教師の授業に対する意識に大きな変化が見られた**。（資料1、資料2参照）3校の児童生徒・教員にアンケート調査を行ったところ、「話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思う」との問いに「当てはまる」と回答した児童生徒は、昨年度30%から37%に上昇した。また、「授業において、児童生徒自ら学級やグループで課題を設定し、その解決に向けて話し合い、表現するなどの学習を取り入れている」の問には、40%の教員が「当てはまる」と回答し、昨年度の23%を大きく上回る結果となった。

(2) 課題

- ①関係機関とのより効果的な連携体制の構築
連絡協議会場で各関係機関との連携を図ってきたが、その役割や責任の範囲がやや不明瞭であり、各機関の専門性を生かしきれない面があった。プロジェクト推進の上で、それぞれの役割をより明確にしていく必要があった。
- ②公表・普及活動をより促進する必要がある
セミナーや公開研究会等の実施機会を多く設け、その周知を全県下に図ってきたが、出席者が一定の地域や校種に固定される傾向が見られた。県内のどの地域でも、教師の授業改善への意識を高め、本プロジェクトへの取組に広がりや深まりを見せていくためには、更なる普及、啓発活動の工夫・改善が必要である。
- ③高等学校への取組強化、小・中・高等学校の連携体制の強化を図る必要がある
本県では、研究指定校に高等学校も加えて全校種での推進を図ってきた。その成果は見られるものの、より一層の連携体制の強化による授業改善が求められている。本県の特徴である、小・中・高等学校連携のよりよい推進体制の在り方を今後も探っていきたいと考える。

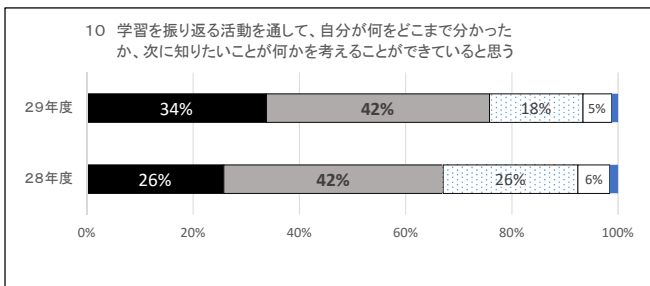
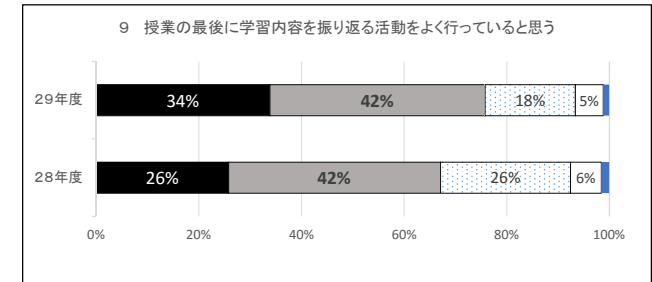
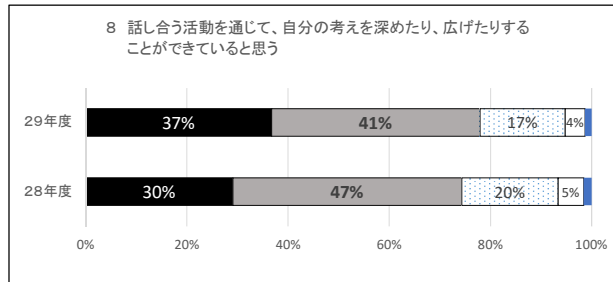
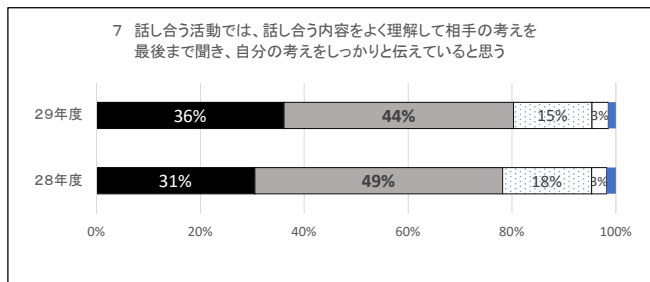
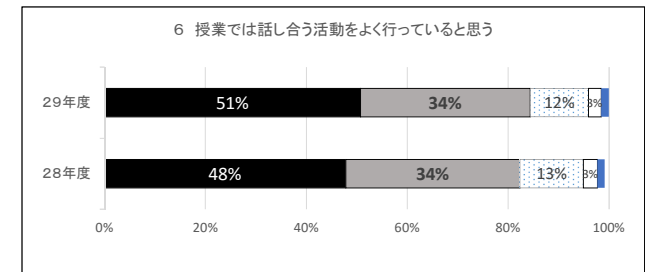
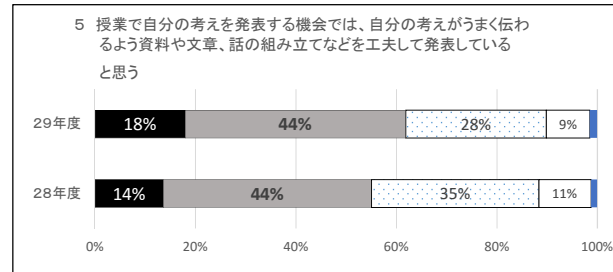
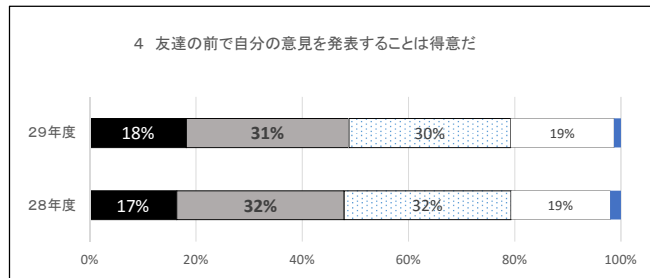
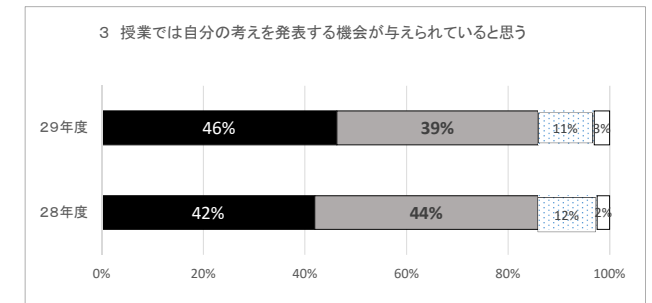
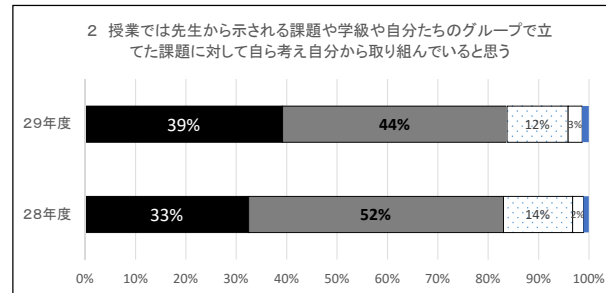
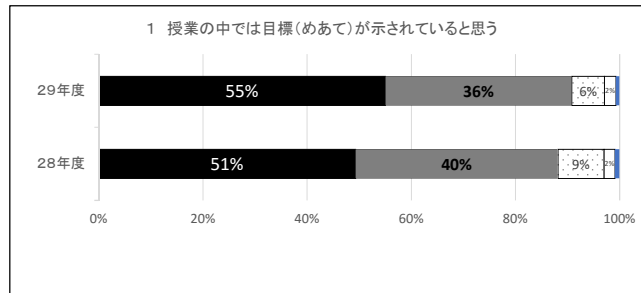
(3) 今後の改善策

- 本県では、以下の重点のもと、本プロジェクトの取組を継続していく予定である。
- ①連絡協議会の機能強化
各研究指定校へのより実質的な指導・助言、セミナーの企画運営、また本県の授業づくりの基本である「思考し、表現する力」を高める実践モデルプログラムの新学習指導要領に合せた改定も、連絡協議会で行っていく。県の授業改善の中核としての機能を本会議にもたせていく。
 - ②各地域の研究指定校を拠点に、プロジェクト取組の周知を図っていく
我孫子市が中心であった本プロジェクトを、全県下に広げていく。そのために、各地域の研究指定校での活動を活性化させ、各種研修会の開催や学力向上交流会での発表など、各地域での取組を強化する。また、2年後には各校で公開研究会の開催を予定する。
 - ③高等学校の研究指定校を増やし、中学校との連携を図る
これまで1校であった高等学校の指定校を2校に増やして推進する。内1校は、すぐ近くの中学校と一緒に、(小)・中・高等学校の連携体制の在り方についても研究の対象とする。

「ちばっ子の学び変革」推進事業の実施 我孫子3校の児童生徒・教師の意識の変容

【児童生徒】

■あてはまる ■どちらかといえばあてはまる
□どちらかといえばあてはまらない □あてはまらない
■無回答



「ちばっ子の学び変革」推進事業の実施 我孫子3校の児童生徒・教師の意識の変容

【教師】

■あてはまる ■どちらかといえばあてはまる
□どちらかといえばあてはまらない □あてはまらない
■無回答

